

インパール作戦の 元日本軍兵士の心情

日本文化チャンネル「桜プロジェクト」(<http://www.ch-sakura.jp/>)のキャスターをしている佐波優子さんが、ビルマ遺骨収集派遣団の一員としてミャンマーを訪問した時に同行した元日本兵2名の方との会話がフェイスブックに載っておりました。その内容が余りにも感動的でありましたのでシェアいたします。

なお、佐波優子さんは、フリーアナウンサーであると共に、ジャーナリストとして、戦後問題、安全保障、原子力発電、慰安婦問題、辺野古、基地問題、憲法などを扱っています。さらに、陸上自衛隊予備自衛官・陸士長でもあり、現在慶応義塾大学の環境情報学部にて在学中です。

以下フェイスブックの記事を原文のまま掲載します。

『番組のサポート会員の方々にプレゼントしている「キャスターのサイン色紙」を6枚描き終わりました。

今までは好きな格言などを書いてきましたが、今回は遺骨収容の現場での忘れられない話を当時の絵とともに再現しました。

ミャンマー（ビルマ）の遺骨収容に行ったときのことは、今でもよく思い出します。遺骨収容派遣団には、インパール作戦で戦った元兵士の男性もお二人参加されていました。お二人とも穏やかなご年配の男性でした。派遣日数も半分くらいまで来たある日の夕暮れのことです。その兵士のお二人と私は、宿泊所の近くの川に行きました。その川はイラワディ川といって戦友が沢山沈んだそうです。夕日が沈んでいく直

前で川の水面がオレンジ色に光る中、お二人は当時のことを語ってくれました。



番組のサポート会員の方々にプレゼントする『キャスターのサイン色紙』を手にしている佐波優子さん

「私は本当は戦争に行くまでは死ぬことが嫌だった。自分の夢ばかり追いかけていたんだよ。でもある日とうとう銃撃戦になって、敵さんの弾が私の頬をかすめたんだ。その時急に、私の背中の後ろに両親や祖父母や全ての日本人がいるように感じたんだ。ここで自分が敵を食い止めて皆を守るために命を落とすのであれば、それはとても幸せな死に方だと思ったんだ。不思議だなあ。あんなに死ぬことが怖かったんなあ」と。とても優しい、でも切なそうな表情でした。

それを横で聞いていたもう一人の兵士の方はそれに応えて「ほんまやったなあ。わしらはみいんな、そんな気持ちで戦ったなあ。日本人を護れるちゅうことが、あ

んときのわしらの希望やったし、喜びにな
とったなあ」とお話をされました。

とても衝撃的でした。死ぬことが嬉しい
だなんて。そのときの私は、戦争はただ
だ辛いものだと思っていたし、絶対に死に
たくなんかないと思っていました。今だ
って、死にたくないです。でも今から70
年前には、誰だって自分の命が一番大事
なこの世界の中で、それでも誰かが死な
なければならぬような状況があって、兵
士の方々は自分がその役目を負うとし
ていた。そのことにただ驚きました。死
が怖いからこ

そ、その死を自分以外の家族たちに負
わせまいと敵の前に立ちはだかろうと
したゆえの思いだったのでしょ

うか。私には想像もできないです。で
すが誰かを護りたいと思っていて
いた兵士の方々が、あのときの戦場
には沢山いてくれたことは事実なの
ですね。

そして護られていた対象がまさに今
を生きている私たちなのだと思うと、
あの戦争を命がけで戦い抜いた兵士
の方々に、感謝の気持ちを伝えたい
と心から思っています。』(川島提
供)